

黒岩重吾 剣は湖都に燃ゆ

壬申の乱秘話





文 春 文 庫

剣は湖都に燃ゆ 壬申の乱秘話

定価はカバーに
表示してあります

1993年 1 月10日 第 1 刷

著 者 黒 岩 重 吾

発行者 新 井 信

発行所 株式会社 文 藝 春 秋

東京都千代田区紀尾井町 3 - 23 〒102

T E L 03・3265・1211

落丁、乱丁本は、お手数ですが小社営業部宛お送り下さい。送料小社負担でお取替致します。

印刷・凸版印刷 製本・加藤製本

Printed in Japan
ISBN4-16-718229-7

文 春 文 庫

剣は湖都に燃ゆ

壬申の乱秘話

黒岩重吾

〈目次〉

黄泉^{よみ}の国は春の地に

9

夜明け前

53

近江の御前仕合

95

湖の影

135

阿騎野に燃ゆ

179

解説 倉本四郎

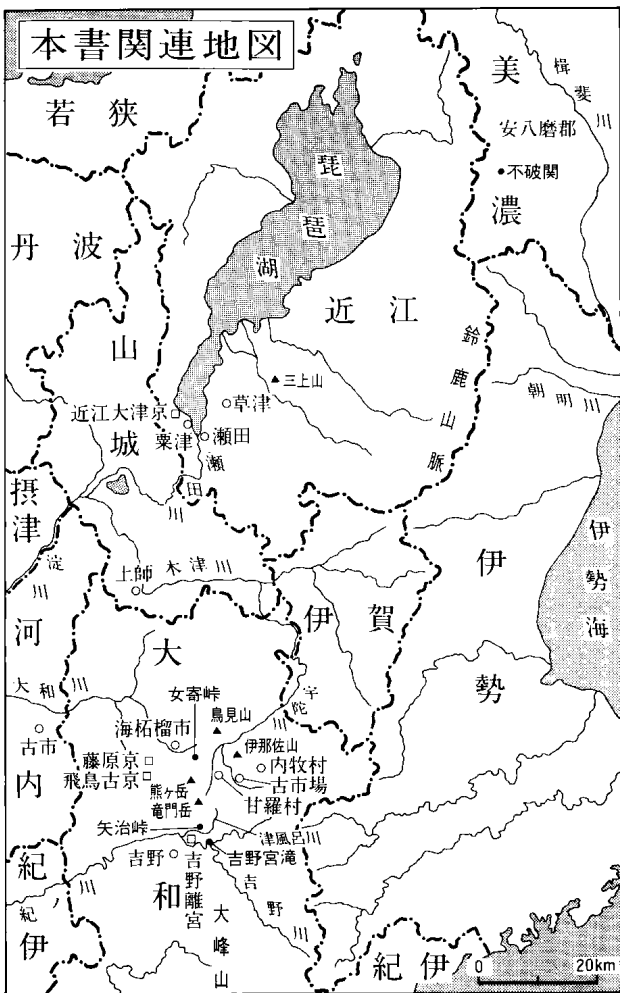
225

系図 地図
原 高野橋
理 康

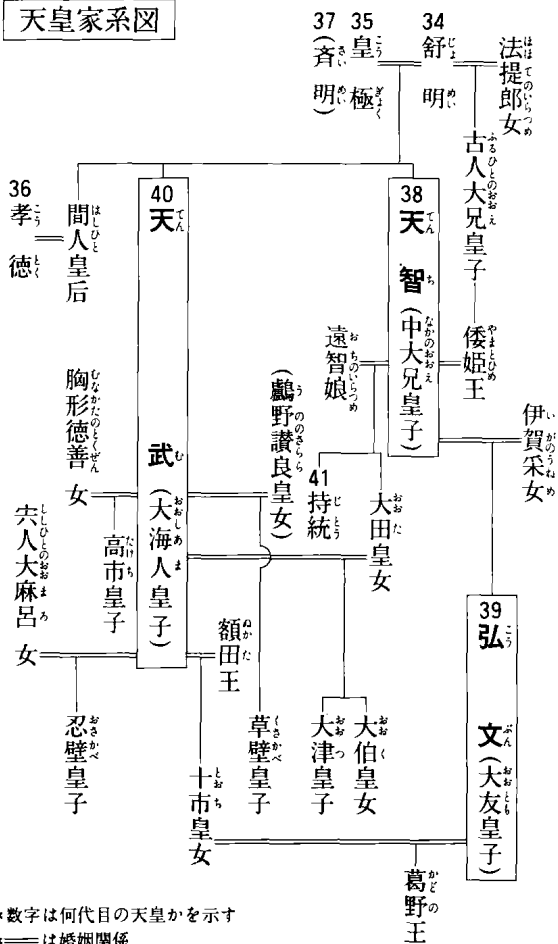
剣は湖都に燃ゆ

壬申の乱秘話

本書関連地図



天皇家系図



* 数字は何代目の天皇かを示す

* — は婚姻関係

初出

黄泉の国は春の地に「オール讀物」87年11月号

夜明け前 同 88年3月号

近江の御前仕合 同 89年1月号

湖の影 「小説現代」89年新春号

阿騎野に燃ゆ 「オール讀物」89年8月号

単行本 1990年1月文藝春秋刊

黄^よ泉^みの国は春の地に

天保二年（一八三一）、現在の奈良県榛原町八滝米山（旧宇陀郡内牧村）にある山の頂で、一人の農夫が蔵骨器ぞうこつぎを発掘した。墓誌があり、それには「壬申年將軍左衛士府督、正四位上文禰麻呂忌寸、慶雲四年歲次丁未九月廿一日卒」と記されていた。

古代最大の乱といわれている壬申じんしんの乱において大海人皇子おほしあまのみこ（後の天武）の舍人とねりとなつた百濟くだらからの渡来系氏族書首根麻呂ふみのおげとねまろの墓であつたのだ。乱後、根麻呂は天武・持統・文武に仕え、従四位下の高位を得、宮廷警護軍の一方の長官になり、死後正四位上を贈られたのである。

根麻呂の墓は伊那佐山いなさやまの傍で、まさに人里離れた山の上にあつた。

根麻呂が左遷されたという記録はまったくないので、根麻呂がそのような場所に葬られたのは彼の強い遺言のせいとしか考えられない。

ただここを訪れた人は、根麻呂が何故、藤原の都の傍や、氏族の本貫地である河内の古市に葬られることを望まず、当時では人跡未踏に近いといつてよい山に永眠することを希望したのか、非常に不思議に思うようである。文書^{ふみ}の氏寺は河内古市の西湊寺^{さいりんじ}だから首を捻^{ひね}るのも当然であろう。

なお根麻呂の碑は現在、蔵骨器が発見された近くにある八滝^{やたけ}の竜泉寺にある。

六七二年旧暦三月、根麻呂は大海人皇子が剃髪^{ていはつ}して隠遁した吉野川の傍^{みよたき}の宮滝の離宮から馬を飛ばし伊那佐山^{いなさやま}に向つていた。

山や野はつつじ、さくら、かたかご、すみれによつて彩^{いろど}られ、宇陀川^{うたがわ}にはやまぶきの花が勢いの良い川水^{うみづ}に頷くように揺れている。この三日間大雨で根麻呂達舎人は離宮から一步も出られず苛々^{いらいら}していた。その雨も昨夜でやんだので各舎人達はいっせいに与えられた任務を達成すべく跳び出したのだ。

舎人達の任務とは山人族を主体にした宇陀・吉野の諸豪族を近江朝との戦^{いくさ}の際、主君大海人皇子に味方させることであつた。

挙兵の場は東国の美濃とすでに決定していた。その際一番大事なのは皇子の妃鸕野讃^{うのさざら}

良、草壁皇子、忍壁皇子、それに離宮にいる女人達を連れて吉野から東国に脱出することである。

近江朝の手は飛鳥から宇陀の郡司にまで伸び、大海人皇子の脱出を警戒していた。

当然、脱出の最中、近江朝の追手との戦も覚悟せねばならない。そのためには可能限り大海人皇子の警護兵を集めることが必要だった。

今、根麻呂が馬を飛ばしているのも、伊那佐山附近の山人族の首長おおくにを味方につけるためだった。

根麻呂は身体を前に倒し、馬に鞭を当てて川沿いの道を疾駆した。華麗な山野の彩りも、宇陀川の銀色の水飛沫に差じらうように揺れるやまぶきの花も根麻呂の眼には入らない。

根麻呂の馬にあおられたように数頭の鹿がすすきの野を走り始めた。鳥が飛び立ち山犬が吠える。

かつて倭国の始祖王神倭磐余彦（神武）が女軍を休ませたという女寄峠に通じる場所の手前まで来た時、根麻呂は漸く馬脚をゆるめた。栗毛の馬は荒い息を吐いている。

正面に見えるのは鳥見山で、優雅で毅然とした感じのする東北の山は伊那佐山だ。根麻呂の脳裡に髭だらけのおおくにの顔が浮かんた。如何にも山人族の首長らしくたくま

しく精悍な容貌の男子である。年齢は四十歳ぐらいだろうか。

先日の話の様子ではおおくにが支配している山人族は四、五百人はいるようだった。もしおおくにが大海人皇子の味方につくことを承諾すれば二、三十名の精兵が得られる。山人族といっても山間の狭地を耕してはいるが、矢張り狩猟が本業だ。弓矢の腕は近江朝が動員する農兵とは較べものにはならない。何が何でもおおくにを味方につけばならない、と根麻呂は決意していた。

根麻呂の主君大海人皇子も、場合によっては散策がてらにおおくにの家に寄ってもよい、と告げた。兵法に優れている皇子は根麻呂の話で、おおくにを味方につけることの価値を感じ取ったようだ。

「今暫くやつかれ（臣）におまかせ下さい」

と根麻呂がいったのは何も功をあげるためではない。おおくにはなかなか洞察力の鋭い人物だった。大海人皇子が彼の家に寄ったりすれば、兵がなく焦っている、と視るに違いなかった。根麻呂はそれを恐れたのだ。

大海人皇子も根麻呂の胸中を察し、まかせる、といった。ただ六月までには味方につけるように、と命令した。大海人皇子は六月ないし七月には挙兵する決意を固めていた。おおくにの家まで曲りくねった山道を考えるとまだ三里はある。何も急ぐ必要はない。

落ち着くのじゃ、肝きもをすえて話し合ねばならない。たんに情熱だけで口説くどける相手ではなかった。

渡来系の文氏ふみうじは智謀の氏族である。東漢氏やまとのあやうじも渡来系だが学識では文氏の方が一段と上だ。根麻呂は大きく息をすると東の方を眺めた。東方の山々は巍巍ぎぎとした三百丈以上の峻険な高山で伊賀に連なっている。うっかり迷ったりすれば一日を無駄にしてしまう。根麻呂は甘羅村かむらむら（大宇陀町？）から古市場の方に向った。

古市場は宇陀郡最大の市場である。

一里を半刻とき（一時間）の並脚なみあしで進み、古市場に通じる道に出、吉野川沿いに北に歩み、坪の内から八滝やたけに向った。道といっても獣途けものみちのような狭い道で、熊笹や灌木かんぼくを掻かき分けて進まねばならない。

農民や旅人には一人も会わない。

ただ時々山中で人の気配がするのはおおくに配下の山人族が獲物を探しているのかもしれない。それとも根麻呂のような未知の旅人を監視しているのだろうか。

襲ひつぎわれては馬鹿気みこているので馬飾りは質素だった。ただ杏葉ぎようようだけは銀である。昨年まで皇太子ひつぎのみこであった大海人皇子の舍人とねりとしての威厳を示しておく必要があった。

根麻呂は皮紐で麻の上衣を締め刀を吊つるし、矢筒を背負い、弓は馬につけていた。甲かつ